

BIMONTHLY REPORT

バイマンスリーレポート
No.

414 SENDAI KEIZAI DOYUKAI
2022.6.20

[特集]

「街道をゆく 仙台・石巻」を読む
～司馬^け遼^{そう}太郎^{ぶみ}からの懸想文～

[巻頭言]

仙台経済同友会の学びを糧に
変革の時代を乗り越えていきましょう

東洋ワークグループ株式会社 代表取締役社長
東洋ワーク株式会社 代表取締役副社長／
須佐 彰典

明日を考え未来を語る

仙台市の起業支援事業TGA(東北グロース・アクセラレーター)
SIA(ソーシャル・イノベーション・アクセラレーター)の
参加者によるプレゼンテーション

東北大学の挑戦

～次世代放射光計画、スタートアップ支援、スーパーシティ構想など～



仙台経済同友会の学びを糧に 変革の時代を乗り越えていきましょう

私は、大学3年の二十歳の時に会社に入り、まもなく50歳になります。仙台経済同友会には、若いころから父の代理で参加させていただいていました。とくに30代後半に至るまでは、メインバンクの倒産やリーマンショックなど、数々の紆余曲折があり、会社はジェットコースターのように好不調の波にもまれました。同友会ではそういうことも隠さずに話していましたので、「経営危機になると、いったいどういう状態になるの?」と、皆さん驚きながら熱心に聞いてくださいました。自分の辛い時期と同友会の思い出が重なって、ずいぶん助けられたと、ありがたく思うことが多かったのです。

時代は、急速な変革期を迎えています。

労働人口の問題も深刻です。当社は現時点では堅調ですが、これは台風の谷間の無風状態で業績が上がっているだけで、ここからが正念場、まさに「切所」に直面していると考えています。先日あるアンケートで「10年先までの事業計画を立てていますか」という質問がありましたが、10年どころか長くても3年くらいで物事を転換していかなければならない時代に来ているのではないのでしょうか。世の中には多くの労働力があって、仕事さえとってくればそこに当然のように人が集まってきた、そういう時代はもう終わりました。これからは、企業理念に立ち返ることが重要だと思います。ポリシーがあって存続する理由のある企業、そこで働く人がしかるべき報酬を得てやりがいを見いだせる会社でなければ生き残れない、駆逐されていくのです。社員の教育やスキルアップを図り、働く人の幸福度を上げていく、それによって稼働率も上がっていく。採用数を増やすのではなく、稼働率を上げ、効率化を図る、会社の経営と

個人の満足度のベクトルが一致していかなければなりません。そこで、注目され急務となっているのが働く環境を根底から変えるDXやIT化です。適性な人材再配置と省人化は、今まさに取り組んでいる当社の課題でもあります。

仙台経済同友会は、企業人が個人として参加している貴重な場です。とくに自分は若いころから参加させていただいていたので、先代社長様やご子息と、世代を超えて長くお付き合いをさせていただいています。社長という立場ではなく、それこそ先輩の「かばん持ち」をしながら、普段は聞けないような経済や財務など専門家の話や、一流経営陣ならではの人生の知恵など、地元集うそれぞれに得難い経験や知識をもった先輩方から学ぶことは、自分だけで獲得する能力の域をはるかに超える貴重な体験です。

父も祖父も、人付き合いを大変大切に作る人間で、若いころは年末年始や連休も自分の自由にはならず家族と行動を共にし、法事は欠かさず、土日にも常に来客があるような生活が辛くてたまりませんでした。しかし、50歳に近づいて「敬神崇祖^{けいしんすうそ}」、その大切さやありがたさを改めて実感している日々です。

仙台経済同友会は、なるべく若いころから参加することが、後の40代、50代の自分の力になると思います。その機会を多くの人に広げるために、準会員制度などを整備拡充して、若い仲間を増やしていけたらと考えています。父には「俺のまねをするな」と言われそうですが、人付き合いの範囲の広さは、私も自信のあるところですが、今後は新たな会員獲得のお手伝いができればと考えております。変革の時代をともに乗り越えてまいりましょう。

「明日を考え未来を語る」

仙台経済同友会では会員の啓発活動として、毎回多彩な講師を招いて例会を開催しています。新時代を生きる経済人として有用な先進の知識や話題など、各例会のエッセンスをぎゅっと凝縮して発信するページが「例会ダイジェスト」です。ぜひお役立てください。

2022年4月、5月の月例会では、下記の講師にご登壇いただきました。講演内容(抄録)を仙台経済同友会のホームページに掲載しております。

4月例会

仙台市の起業支援事業TGA(東北グロース・アクセラレーター) SIA(ソーシャル・イノベーション・アクセラレーター)の参加者によるプレゼンテーション

仙台市では、人口減少や高齢化という東北の課題を解決し、持続的経済成長を実現するために、東北全域にわたりベンチャー企業の成長を後押しする様々な支援事業に取り組んでいます。今回はその中から、仙台経済同友会起業支援委員会が支援している仙台市の起業支援事業TGA(東北グロース・アクセラレーター)、SIA(ソーシャル・イノベーション・アクセラレーター)の参加者によるプレゼンテーションを実施しました。



◎司会進行

(株)MAKOTOキャピタル 代表取締役 福留 秀基氏

◎プレゼンテーション【SIAプログラム】

- ・佐々木 綾子氏(認定NPO法人STORIA 代表理事)
- ・佐藤 里麻氏(一般社団法人くるむ 代表理事)
- ・野崎 健介氏(株式会社ゆらリズム 代表取締役)

◎プレゼンテーション【TGAプログラム】

- ・加藤 広大氏(amu株式会社・宮城県気仙沼市)
- ・佐藤 研一朗氏(円ポイント株式会社・宮城県仙台市)
- ・高山 智壮氏(株式会社高山・宮城県塩竈市)

5月例会

東北大学の挑戦 ～次世代放射光計画、スタートアップ支援、スーパーシティ構想など～

東北大学 理事 副学長(企画戦略総括) **青木 孝文氏**

建学以来、「研究第一主義」「門戸開放」「実学尊重」の理念を掲げ、世界トップレベルの研究・教育を創造してきた東北大学。「世界と地域に開かれた大学」の方針の下、人的・知的資源の開放を進めながら、社会全体の発展に貢献してきました。中でも積極的に取り組んでいるのが、地域が抱える諸課題の解決に向けた産学官連携です。講演では、副学長の青木孝文氏が、世界最高性能の放射光を利用することができる先進施設の整備などを紹介しながら、地域の経済・社会の発展に挑戦する東北大学の新しい姿を紹介すると共に、地域企業の方々への連携参加を呼びかけます。



◎講師紹介

東北大学 理事 副学長(企画戦略総括)

青木 孝文氏

1992年 東北大学大学院工学研究科(電子工学専攻)博士課程後期3年の課程修了。同工学部電子工学科助手。94年 同大学院情報科学科研究科助手。96年 同助教授。97年 科学技術振興事業団さきがけ研究21研究者兼任。2002年 東北大学教授。06年 東北大学総長特任補佐併任。18年 同副学長(広報・社会連携・情報基盤担当)併任。20年 同理事・副学長(企画戦略総括担当、プロボスト、CDO)。2005年よりIEEE Japan Council理事、映像情報メディア学会理事、計測自動制御学会常務理事など多数の学協会役員を務める。

「街道をゆく 仙台・石巻」を読む ～司馬遼太郎からの懸想文～

来年、生誕100年を迎える作家・司馬遼太郎氏。数多くの歴史小説がベストセラーになり、今も読み継がれています。小説以外にも数多くの随筆や紀行文も書いています。紀行文「街道をゆく 26 嵯峨散歩、仙台・石巻」では宮城県を歩いています。最後に訪れた石巻の項では「紀行というよりも、懸想文に近いものだった」書いています。読むと、氏が訪れてから37年経てもなお、宮城県の、仙台の、石巻の見慣れた風景が、司馬氏の深い知識から生まれたやさしいまなざしを通じて、新たな視点をもたらしてくれそうです。

仙台平野は

沃土というほかない。

司馬遼太郎

「貞山堀（貞山運河）を美しく保全しているのは
仙台藩の後身らしく、武骨で教養のある風儀。」

大阪在住の司馬遼太郎氏が仙台空港に向けて大阪から仙台へYS11に搭乗したのは1985年(昭和60)のこと。その機内で、奥州王たることを目指した伊達政宗について考察している。

政宗が奥州平定にいそしんでいるときにすでに豊臣秀吉は関白太政大臣となっており、天下を統一していた。秀吉に降参の意志を伝えるために小田原に向かった政宗の心中に思いをはせ「政宗は、遅くうまれすぎた。このうらみは、かれにおいて生涯つづいた」と書いている。そして、仙台藩領の原型を作ったのは政宗だったとし、仙台藩の米を中心とした経済について以下のように解き明かしている。

仙台平野は肥沃な穀倉地帯で表高62万石だったものの、藩全体で新田開拓をし続けて実高は100万石をこえていたといわれる。仙台藩は余剰米を江戸に送って売り「江戸送りの米は、江戸中期には30万石前後にもなった。巨大な米穀商ともいべき藩だった」と書き、その米一筋の経済が、他藩のように商品開発をしなかった原因とみている。

そして、大正末から昭和初年にかけて刊行された「仙叢書」をひもとき「沃土の民は材ヒズ」という言葉を紹介している。

これは中国の古典にでてくる言葉で「肥沃な土地の民は、つかいものにならない、沃土の民は材がよくない」という意味だという。

藩政時代の舟運を支えた運河。東日本大震災を経て周辺の景色は変わったものの運河はほぼ変わらずに流れている



江戸中期以降、諸藩は殖産に一所懸命だったのに対し「仙台藩はそれを怠った。『沃土の民』だったのである」と結んでいる。

こうした考察をしている内にYS11は仙台空港に着陸。広大な田園風景を眺め「沃土というほかない」と仙台平野の穀倉地帯としての豊かさを実感した。

氏は「仙台市に入る前に沃土の酵素をたっぷり血のなかに入れておきたかった」ことから「阿武隈川河口の荒浜まで行ってください」とタクシーの運転手に頼んだ。荒浜は江戸時代に、仙台米を積み出す港として石巻とともに栄えた港だったからである。

しかし、荒浜は遠望するだけにしてゆったりと水をたたえる運河に目を止め「これはもしかすると貞山堀じゃないですか」と運転手に聞くと、運転手はそうだと答える。

あらかじめ、藩政時代の米の流通運搬について調べていたようで、仙台米を水上輸送するために掘られた貞山堀を一目見たいと思っていたという。開発などで消滅していたかとも思っていたのに「ともかくもこれほどの美しさでいまなお保たれていたことに、この県への畏敬を持った」と書いている。

さらに、運転手から貞山堀の水は海水が少し混じるために田畑の灌漑にも使えないことを聞き、現在は無用の物なのだが、観光として宣伝することなくだまって保存に努めていることを知って「仙台藩の後身らしく、武骨で教養のある風儀が、そのことで察せられるのである」と結んでいる。

歴史小説家としての視点から豊臣秀吉の天下統一の前後の伊達政宗を「遅く生まれすぎた」とし、豊富な知識から生み出した伊達政宗から始まった伊達藩の「沃土」の産業経済についての考察が興味深い。そして貞山堀（貞山運河）を見て美しく保全し続けている仙台人に対して感心しているが、氏が次に感心しているのは仙台の街づくりである。

日本一の長さの運河群「貞山運河」「北上運河」「東名運河」

貞山堀は、一般に貞山運河と呼ばれており、明治時代に「貞山堀」から「貞山運河」と正式に改称された。宮城県の阿武隈川河口と松島湾を結んでいる運河で、貞山とは伊達政宗の諡（仏教における戒名と同じく神道における死後の名前をいう）。貞山運河の名称は、明治時代に仙台市長となった早川智寛により、政宗がこの運河の大構想を持っていたことを偲んで名づけられたという。

慶長5年(1600) 岩出山から仙台に居城を移した伊達政宗は築城と城下町の建設にとりかかる。そのための阿武隈川流域(現福島県)から建設資材などを運ぶための運河が必要と考え、後に石巻港を開いた川村孫兵衛を召し抱えて運河開発の指揮にあたらせ、この運河は「内川(木曳堀)」と名付けている。

その後も、歴代藩主により運河開発が続いた。二代藩主伊達忠宗の時代には塩釜湾から大代にいたる大代堀が掘削された。四代藩主伊達綱村の時代になると仙台下への物資輸送、仙台米の運搬が盛んになり、塩釜湾から七北田川の蒲生までの御舟入堀が造られた。

明治初期には七北田川と名取川の間に新堀が掘られてほぼ現在の姿に完成した。現在、宮城の運河群は「貞山運河」「北上運河」「東名運河」の3つからなり、総延長約49km。日本一長い運河群となっている。

2011年の東日本大震災によりこれらの運河群は大きな被害を受けた。司馬遼太郎氏が感心した貞山堀に沿った美しい松並木もほぼ流されてしまった。しかし、運河群はこの東日本大震災の津波に対して一定の減災効果があったことが検証されている。運河に流入した津波は一時的に進行が留まることで、津波到達の遅延効果があったと考えられている。一方で運河を遡上した津波が内陸部まで到達し被害をもたらしたことも確認されている。

現在、宮城県では行政と学識経験者、地域住民が協力して運河群再生に取り組んでおり、運河沿いに桜を植える活動なども行っている。また、各民間団体も貞山運河を中核とした観光資源として活用するためにさまざまなイベントの企画も実施している。



▲司馬遼太郎氏が「沃土というほかない」という仙台平野に広がる広大な田園風景

司馬遼太郎 「街道をゆく」

1923年大阪生まれの司馬遼太郎氏は60年「梟の城」で直木賞を受賞。主な作品に「龍馬がゆく」「国盗り物語」(菊池寛賞)「世に棲む日日」(吉川英治文学賞)「花神」「坂の上の雲」「菜の花の沖」など多数。歴史小説のほか、「街道をゆく」「この国のかたち」「風塵抄」など紀行、エッセイ、対談集なども多い。

紀行文「街道をゆく」は1971年から氏が亡くなるまでの1996年まで週刊朝日に連載された。書籍となり全43巻が発刊されている。

司馬氏がたどった街道は、日本国内ばかりでなく、ヨーロッパ、アメリカ、アジアまでに及んでいる。東北エリアでは「26 仙台・石巻」のほか、「3 陸奥のみち」「10 羽州街道」「29 秋田県散歩」「33 白河・会津のみち」「41 北のまほろば」がある。

「26 仙台・石巻」で訪れたのは、以下の地域。

仙台空港～貞山堀～竹駒神社～仙台市(仙台駅・一番町・魯迅下宿跡・東北大学・大崎八幡宮)～多賀城遺跡～塩竈市(御釜神社・鹽竈神社)～松島町・瑞巖寺～石巻市(日和山・ハリストス正教会)



朝日文庫 726円(税込)

仙台駅前のペデストリアンデッキの景観は

世界のどの都市にもない造形的な美しさがある。

氏が仙台を訪れたのは初めてのことでない。

それ以前に、作家の井上ひさし氏の案内で山形蔵王から仙台へと来て、井上氏の友人たちと会食したという思い出が書かれてある。

夜、井上氏とともに仙台市内に入り仙台の都心の夜景を見たとき「大阪よりも、都市としてはよほど上ではないか」「道路わきのビルの姿がよく、外装にも気品がある」と感じ「ビルが都市美の重要な要素であることを思うと、平均的な大阪のビルよりも外装や設計にお金がかかっている」とおどろく。

しかも、井上氏の友人たちにそのことを話すと「仙台の人々はそれを自慢することもなく『アア』と笑顔だけを示した」ことに、これが「奥州のゆかしさというものだろう」と仙台人に対してやさしいまなざしを向けている。

氏が住んでいる「大阪は無計画に広がった都市秩序飲む混乱と汚れた景観に頭をかかえている」といい、大阪市や大阪府の要人たちがヨーロッパなどの都市を見学に行ったりしているが、そういう人たちに会うごとに、「むしろ仙台を見学しに行くべきじゃないですか」と熱心にすすめたという。

さらに仙台の都市景観の中でも氏が絶賛したことで知られているのが仙台駅前のペデストリアンデッキである。

一日目、仙台空港に降り立ち、貞山堀や岩沼の竹駒神社を見て、仙台駅前のホテルに宿泊する。そして翌朝、食堂の窓越しに「宙空の歩道が見える」と書いている。ペデストリアンデッキのことである。

「仙台駅の駅前空間は、世界のどの都市にもない造形的なうつくしさがある。色彩的にもいい」「タイルの色は数色もちい、ほどこされている縞模様はあわい紫色で、印象派の陽かげをおもわせ、まことに胸がひらけてくるようなあかるい表現になっている」とほめたたえている。

さらに、仙台駅前の風景ばかりでなく仙台中心部の街並みについても「まことにいい街である」「街に秩序があって、いよいよ気分がいい」「アーケードながらも、外光はたっぷりとり入れられている」と、賞賛する文章が続く。

▼
タイルの色合いを司馬氏は「印象派の陽かげを思わせ」と表現している



日本最大規模の 仙台駅前ペデストリアンデッキ

仙台駅西口のペデストリアンデッキが完成したのは1981年。その後も商業施設の再開発などに合わせて増設延伸しており、2004年には仙台駅東口にも完成した。全国に約2000ヶ所以上あるペデストリアンデッキの中でも最大規模で、床面積は約1万3000㎡。

景観に配慮して、駅舎に合わせたクリーム色をメインとした配色で、手すりをステンレス製にしている。鉄道ファンの間では、このペデストリアンデッキが日本最大規模であり、司馬遼太郎氏が絶賛したことはよく知られている。



司馬遼太郎

この川を見ていると、政宗は全体的として
すつきりした男だったことが分かりますよ。

司馬遼太郎



日和山から北上川を見下ろし

▲日和山から見た北上川河口。司馬氏はその光景を「海に入る北上川」と書く。東日本大震災により司馬氏が見た風景とは一変している
▶日和山から北上川、中瀬公園を望む（震災前）



ひよりやま 日和山公園

標高56mの日和山一帯に広がる公園。眼下に旧北上川河口を見下ろす景勝地。晴れた日には太平洋の向こうに男鹿半島や奥松島まで見渡せる。藩政時代から名所として知られており、松尾芭蕉と曾良はもとより、多くの文人たちが訪れている。園内には宮沢賢治、斎藤茂吉、石川啄木などの歌碑や、北上川改修工事の指揮を取った川村孫兵衛の像もある。



▶日和山公園内の木々の間にある芭蕉と曾良の像。芭蕉と曾良は1689年（元禄2）に、石巻を訪れている

中州に作られた中瀬公園の中に旧石巻ハリストス正教会教会堂は移築保存されていた。明治時代におそらく西洋建築というものを見たことがない土地の土工さんが作り上げたに違いない教会を眺めて「石巻は、いいところですね」と案内してくれた神父に話す。

そして「私は、東北にハイカラさを感じつけてきたが、そういう思いを形にすればこれではあるまいかとも思ってくるのである」という文章で「仙台・石巻」は終わっている。

氏から届けられた「街道をゆく 26 仙台・石巻」というラブレター。

東日本大震災のために氏が見た風景とは変わっている地域も少なくないが、もう一度伊達政宗の時代から現代までの宮城の地に生きる人々の営みを見直すきっかけとなりそうだ。

旧石巻ハリストス正教会教会堂

明治時代、ハリストス正教会の伝教師たちが石巻周辺で布教活動を行った。1879年（明治12）石巻村（石巻市千石町）に「聖使徒イオアン聖堂」を建設され、石巻の正教会信徒が集まったという。これが石巻ハリストス正教会教会堂となった。

1978年（昭和53）、宮城県沖地震によりこの聖堂は大きな被害を受けたため、同じ敷地内に新教会堂が建設されることになった。貴重な文化財である旧教会堂は、旧北上川の中州にある中瀬公園内に1980年（昭和55）移築・復元された。教会としての役目を終えて、旧石巻ハリストス正教会教会堂として石巻市指定有形文化財に指定され一般公開されてきた。司馬氏が眺めたのはこの教会で現存する木造教会堂建築としては最古のもの。

2011年の東日本大震災では大きな被害を受けたものの奇跡的に流失を免れ、石巻市が復元することを決定。2019年（令和元年）復元完成し、現在も一般公開されている。なお、千石町に建てられた新教会堂は、東日本大震災で浸水被害を受けたものの流失を免れた。

※日本ハリストス正教会＝明治時代、ロシア正教会の宣教師によって、日本に創建された東方正教会系の教会。ハリストスはロシア語でキリストのこと。



▲設計者は不明だが、明治時代の信徒によるものと考えられている。屋根は瓦葺で、1階は畳のある集会室となっている。現在、石ノ森萬画館に隣接して建ち、周辺は復興のシンボルとして公園整備事業が進められている

新入会・交替会員紹介

会員総数 334名 (2022年5月31日時点)

交 替 (9名)



会員
中村 出様
SMBC日興証券
株式会社
仙台支店長



会員
山田 明広様
総合警備保障株式会社
宮城支社長



会員
坂本 欽司様
株式会社竹中土木
東北支店長



会員
熊谷 秀晴様
東光電気工事株式会社
東北支社長



会員
石田 亮様
戸田建設株式会社
東北支店長



会員
菅原 亨様
株式会社
日専連ライフサービス
代表取締役社長



会員
佐野 寛人様
日本航空株式会社
東北支社長



会員
上原 慎太郎様
日本製鉄株式会社
東北支店長



会員
石下 義治様
リコージャパン株式会社
執行役員マーケティング本部
東北地域担当兼宮城支社長

今月の本棚



『ウニはすごいバツタもすごい：デザインの生物学』

著 者：本川 達雄
発 行：中央公論新社
定 価：924円

「地球上には多くの生き物がいる」というフレーズでどんな生き物を想像するだろう。ナマコやヒトデを最初に挙げるのは少数派だろう。ヒトという生き物は陸上で暮らし、左右対称の体つきで、目は前方に付いている。そして何より背骨がある。本書の主役はこれらの特徴を持たない生き物達。トップバッターがサンゴなのも象徴的だ。見かけはほとんど枯れ枝のようでも分類上はれっきとした動物だ。置かれた環境で生きていくのは大変なこと、そして、適応するための道筋は一つだけとは限らない。本書を読めば自然と胸落ちする。

評者／中村いり

読書の楽しみは人それぞれですが、
日ごろはどんな本を読んでいますか？
自分では選ばない本の中に、
思わぬ気づきやヒントが見つかるかもしれません。



『バンクシー アート・テロリスト』

著 者：毛利 嘉孝
発 行：光文社
定 価：1,078円

バンクシーの名が日本で広く知られたのは、2019年、小池都知事がツイートした、防潮堤の片隅の小さなネズミの落書きからだろう。しかしその20年前には既知の人ぞ知る存在で、日本でも単独インタビューが行われている、本書はそのインタビューの仲立ちをした人物によって書かれた、いわばバンクシー入門書である。

出身地のプリストルがどういう都市かを導入に、最終章で防潮堤のネズミへの提言で締め括られる。バンクシーの何が特別で、なぜこんなにも世界で支持されるのか、その理由までが一望できる。

評者／中村いり

宿泊業コ口ナ下選択・集中を

新型コロナウイルス禍で
厳しい事業環境に置かれた
東北の宿泊業界で好調を維
持するホテルや旅館がある

東北支店は、リポート「選ばれる宿になるための選択」と集中」を発表した。客足は完全には戻らないとの前提に立ち、顧客満足度を上げる戦略や従業員の士気を高める労務管理の好循環が成功事例の特徴のようだ。

東北支店によると、好調な宿泊施設には立地や規模、業態の違いはあるても、いずれも集客努力と、生産性向上による費用の適正化が見られた。

具体的には「顧客訴求力・満足度の向上」「従業員が複数業務をこなす」「マルチタスクの推進」の三つ

顧客を絞りブランド化 従業員は担当超え協力

政投銀東北支店レポート



ラウンジ業務をこなすフロント会計担当の岡本さん＝松島町の「松島二の坊」

が相互に作用し好循環を生み出すという。

集客については、顧客ターゲットを絞り込み、宿泊

施設そのものが「旅行の目的地」になるブランドコンセプトを明確化することで、顧客の満足度を上げ、客室フロントの各担当が相乗り

自発的に提案するようになる効果があった。また、宿泊客数に合わせて出勤する加価値や生産性を高めておく必要がある」と話す。

選択・集中を

結果、従業員が顧客と接する機会が増えてニーズに気づきやすくなり、付加価値の高いサービスへの改善を

保しつつ人件費を圧縮できるという。

東北支店の小笠原悠祐業務第二課長は「アフターコ

「松島」の坊「改革を実践」

宮城県内で四つの旅館を展開する一の坊グループ(仙台市青葉区)の「松島一の坊」(宮城県松島町)は、コロナ禍をきっかけとしたブランドの磨き上げや生産性向上に積極的な宿泊施設の一つだ。

水と庭園が広がり、宿泊客はラウンジや温泉で自由に過ごす。固定料金制度で飲食やアクティビティに追加料金は発生しない。従業員はインカム（相互通信式構内電話）などでやりとりしながら、持ち場を変えていく。串立やせうらまなシヤは、6、7年のはかかる改革にコロナ禍で一気に挑戦し、ゆったりとした時間を過ごすブランドイメージを明確化できた」と語る。

日帰り入浴を2020年3月末までやめて

精算自動化、日帰り入浴休止

宿泊客に特化した。21年12月に宮城県の温泉宿で初めて自動精算機を設け、18年導入の固定料金制度と合わせ、従業員を煩雑な会計処理から解放した。

タスクを本格化させ、従業員がより効率的に持ち場を交え、顧客のニーズに応えやすい人員体制を整えた。

本来はフロント会計担当の岡本ななみさん(28)は、バーで出すカクテルにオリジナル品を提案し、採用されるなどした。「担当を超えて協力し合うようになった。しっかりと休めるようになったし、チェックインで接したお客さまに夕食会場などで顔と名前を覚えていてもらえるのもモチベーションになる」と話す。

(出典:河北新報 2022年6月11日(十))

梅雨時期を迎え、雨天の日が多くなってまいりました。6月からは、新型コロナの水際対策も緩和され、入国者数上限が2万人になり、外国人観光客の入国も再開されています。今年はどんな夏になるのでしょうか。

さて、今回の特集では、司馬遼太郎の「街道を行く」の仙台・石巻を取り上げました。「これほどまでに宮城の地や仙台という都市が高く評価されていたことを、初めて知った」という方も多かったのではないのでしょうか。次号特集もご期待ください。